うに漢字とカタカナでそれぞれ園芸品種名と種名を区別することが可能ではあるが，混乱の原因となる可能性も否定できない．しかし，日本語名においては，同名の園芸品種名と種名を禁止するICNCPのような一般的な規則はない．種苗法や商標法においては禁止されているが，これを植物名一般に拡大適用できる根拠もない．なによりも，このよく知られた植物において，品種名，雑種種名どちらに対しても新たな名称が許容される可能性はほとんどない．よって現状のまま雑種種名，品種名とも「ソメイヨシノ」とし，雑種種名と品種名を区別して用いる必要があるときは，「種ソメイヨシノ」，「品種ソメイヨシノ」として区別することが妥当と考える．

([a]National Institute of Fruit Tree Science,
National Agriculture and
Bio-oriented Research Organization,
[a]農業・生物系特定産業技術研究機構果樹研究所
E-mail: malrose@affrc.go.jp
[b]Forestry and Forest Products Research Institute,
[b]森林総合研究所
[c]Hokkaido Research Center, Forestry and Forest
Products Research Institute
[c]森林総合研究所北海道支所)

新　刊

□杉山純多（編）：**菌類・細菌・ウイルスの多様性と系統**　492 pp.　2005.　¥6,800＋税．B5版．ISBN: 4-7853-5827-0.

本書は岩槻邦男・馬渡峻輔（監修）のバイオダイバーシティ・シリーズ4である．化石がほとんど発見されず，顕微鏡的な存在で形態的にも未分化であるため，系統の解明が立ち後れていた菌類・細菌・ウイルスの系統に関して，この半世紀に蓄積されてきた分子系統学的解析の成果を盛り込んだ意欲的な内容を含んでいる．5部で構成され，第I部は総論で，微生物と総称される菌類，細菌，ウイルスの相互の関連を説き，さらに生物界全体をモネラ，プロトクチスタ（Protoctista），菌類，植物，動物の5界体系あるいはバクテリア，アーキア，真核生物の三つのドメイン（domain）とした場合の微生物の位置づけについても言及している．第II部は概論で，形態，生活環，生理・生化学，遺伝子や遺伝情報，生態・分布など，系統解析の基礎となる最新の知見を紹介している．第III部以降は各論で，菌類（第III部），細菌（第IV部），ウイルス（第V部）に分けて多様性と系統が詳述されている．各論のなかでは，第III部の菌類が話題の中心となっていることは当然であるが，細菌やウイルスの系統について詳述されているのは有り難い．

菌類，細菌，ウイルスの研究については，医真菌学，病理学，発酵学など応用面からそれぞれに深く研究されてきたが，全体を通して系統的に解説されたことが殆どなかった．各分野でそれぞれに研究している16名の研究者の論説を，ここまで纏め上げられた編集者の努力をまず讃えたい．本書を通読することによって，斯学に精励されている研究者が微生物の全体像を振り返り，自分の研究の意義を再確認する機会となり，他方ではこれからこの方面の研究に進もうとする若手の研究者の道しるべとなるものとして推奨したい．

本書の随所に示されているように，微生物の系統に関する最近の成果には目を見張るものがある．門のレベルでの系統関係には異論はなさそうに見えるが，それ以下の系統については，形態や生態から得られた従来の結論と必ずしも一致しないなど，残された課題が多いことも痛感する．また，未知の種が細菌では既知種の100倍，菌類では20倍も予想されるとすれば，未知種の探索が急がれねばならない．一方では，比較的知られた菌類の中に，裸名のまま残されているものもあると聞いているので，こうした問題も早急に片づけられねばならない．

ともに顕微鏡的あるいは電子顕微鏡的であることから，本書ではウイルスも対象としているが，細胞性の細菌や菌類と非細胞性のウイルスは全く異なるものであり，前述の5界体系にも含まれない．こうした点からもウイルスを本書の対象とすることには無理があるように見える．

15項目のコラムはそれぞれに身近な話題が取り上げられていて興味深い．巻末に掲げられた分類表はたいへん参考になるが，本文の

記述と一致しないところが見受けられる．子嚢菌，担子菌について言えば，形態に基づく従来の分類と最新の分子生物学に基づく分類の対比があれば，今後の課題がさらに明白に理解できたかも知れない．　（黒川　逍）

□Yakubov V. V. and Chernyagina：**Catalog of Flora of Kamchatka (Vascular Plants)**　165 pp．2004．A4版．Izdateljstvo Kamchatpress, Petropavlovsk-Kamchatsky. No. ISBN number.

カムチャツカ半島に生育する維管束植物のリストであり，本文はロシア語で書かれている．本書はハードカバー，印刷は鮮明で，紙質も良く，1980年代から90年代にかけて出版された極東維管束植物誌（全8巻）とは隔世の感がある．ところどころにA6サイズ（葉書大）でクオリティの高い線画が挿入されている．本自体はA4版なので，この線画がとても見やすい．多くのロシアの学術書がそうであるように，本書も引用文献のリストが充実している（もっとも入手困難なものが多いが）．北東アジアのフロラに関心のある人には必携の書であると思われる．定価はついていない．入手を希望される方は著者のヤクボフ博士に問い合わせてみたらどうだろうか？彼のメールアドレスはyakubov@ibss.dvo.ruである．なお，博士はロシア極東地方産維管束植物のカラー図鑑の刊行を準備中だということである．　（門田裕一）

□Machalova O. A. and Yakubov V. V.：**Flora of Commandar Islands**　120 pp. 2004. Institute of Biology & Soil Sciences, Vladivostok. ISBN: 5–7442–1380–5.

前掲書の著者の一人であるヤクボフ博士が関わった書をもう一つ紹介する．本書はコマンダー（コマンドルスキー）諸島に生育する維管束植物のリストである．こちらも本文はロシア語だが，サイズはB5版で冊子風，線画も同諸島の簡単な地図のほかにはない．こちらも参考文献は充実している．前掲書と併せて，いわゆる北太平洋要素の植物の分布を調べる時に役立つと思われる．　（門田裕一）

□大場秀章：**大場秀章著作選I　植物学史・植物文化史**　419 pp．2006．￥4,800．A5．八坂書房．ISBN: 4–89694–788–6.

本年四月で定年退職する著者の多くの作品を，改めて整理し，書き改めたもので，二巻となる予定である．本巻では植物学史，植物文化史関係を扱ったもので，初出一覧によると22点の作品から抽出されている．

第一部植物学における知の体系化，第二部日本近代植物学への架け橋—江戸・明治の巨人たち，第三部日本の植物に魅せられた人々，の三部より成る．第一部では，分類という作業の発展にともなう命名の必要性から，学名の誕生と発達，それを裏付ける標本と標本館の意義，転じてヨーロッパ本草書の紹介と評価におよぶ，第二部は江戸末期から明治へかけて，日本の近代植物分類学の発達にかかわりを持つ本草家，研究者，植物画家の紹介である．第三部では第二部との関係で，ヨーロッパ植物学を日本へもたらし，また日本植物を世界に紹介した人たち，ケンペル，ツュンベルグ，シーボルト，ミクエルの業績の再検討がなされている．

著者は前書きに「既知の文献・資料を活用して，私なりの解釈や評価を述べたに過ぎない」と記しているが，文中至る所にそういう解釈や評価が散りばめられ，博引旁証，各章の参考文献や注記は240件を超える．非常に読みでのある一冊である．II巻は植物分類学・植物地理生態学と題するものだそうで，期待される．　（金井弘夫）